ふるさとへぐり再発見

安養寺瓦窯跡

19

下垣内に昔、灸（やいと）で有名だった安養寺（あんようじ）があり、この南側、現在墓地になっている場所で以前瓦を焼いた窯跡が発見されました。

ここは、平群中央公園予定地の東接地で、廿日山丘陵（はつかやまきゅうりょう）の東端部分にあたります。

この窯のことは昭和34年に刊行された「平群村史」に記述されていますが、その後の調査でここで焼かれた瓦が藤原宮の宮殿の屋瓦として使用されたことがわかりました。

窯は山の斜面をトンネル状に掘って造られた登り窯の形態で、2基が確認されています。これ以外の窯が存在した可能性もあります。

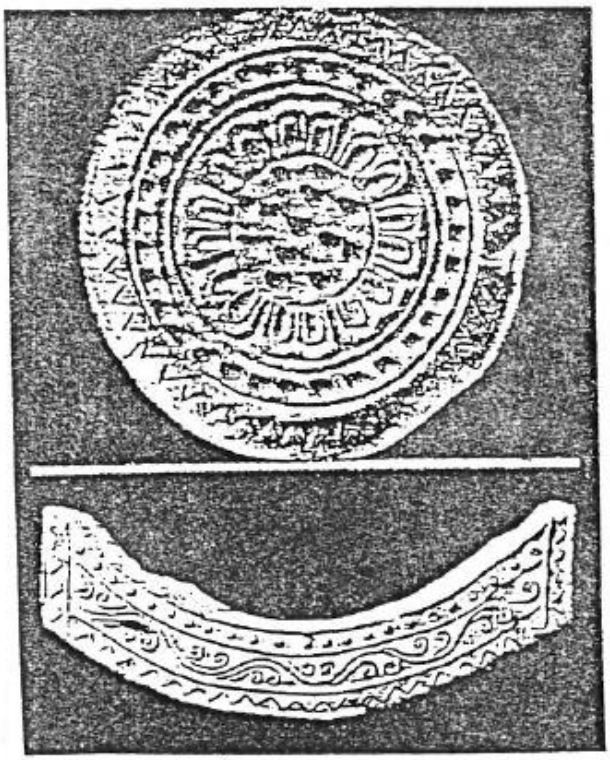
付近では平瓦の破片が散乱し、スサ入り粘土も地表に露出していたらしいので、登り窯の天井をスサ入り粘土で覆った半地下式の構造だった可能性があります。

写真が安養寺瓦窯跡から出土した瓦で、上が軒丸瓦、下が軒平瓦です。

軒丸瓦（のきまるがわら）は八葉の複弁蓮華文（ふくべんれんげもん）を主体とした見事なものです。

軒平瓦（のきひらがわら）は左から右に唐草模様が流れるようにデザインされた偏向唐草文（へんこうからくさもん）を中央に置いた美しいものです。

安養寺瓦窯跡出土軒瓦



軒丸瓦

軒平瓦

藤原宮の発掘調査を続けている奈良国立文化財研究所の方の話では、藤原宮の宮殿の屋瓦の中では、やや後出するタイプの瓦で、7世紀の最終末頃に使用された可能性があると話されていました。

安養寺瓦窯跡から藤原宮跡までは直線で17キロもあり、重い瓦を運ぶのは大変です。

瓦窯のすぐ横を流れる竜田川を下り、大和側をへて飛鳥川を遡った水上ルートを利用して運ばれたのではないかと思われます。

この窯跡の存在は、平群氏が朝廷に仕える中で、藤原宮の造営に協力していたことの傍証といえるでしょう。